

---

# アクト・ファミリア

カミハル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アクト・ファミリア

### 【NZコード】

N5242W

### 【作者名】

カミハル

### 【あらすじ】

家族を失った悲しみを埋めるために家族の写し身である五体のアンドロイド、アクトを生み出した研究者。

やがて量産されたアクトは世界中に広がり、人々の生活の支えとなるが、世代を超えて人々に虐げられだしたアクトは人間たちに牙を剥き、ギアと呼ばれる害あるものに姿を変える。

暴走したアクトから人間たちを護る最初に生み出された五体のアクトは、同じ家族同士であるアクトが殺しあう現状を変えようと戦うが、人間はそんな彼らを裏切った。

人間が滅ぶのが先か、全てのアクトが破壊されるのが先か、人間対アクトの全面戦争が始まる。

数億の人間と戦うアクトたちを指揮する初期アクト五体の長男、ガンマ。数多くの同胞と、家族を戦いで失っていくうちにガンマも徐々に壊れしていく。

## 人と家族との百年戦争

その日、彼は歓喜した。

五年前、家族を事故で失い、その寂しさから逃げるように長年研究し、開発を進めていた物がようやく完成したのだ。

いや、もう者と呼ぶべきだらう。

「博士、バイタル安定、脳波正常、五時間後には起動します」

五年間諦めず、世間と同じように、バカな研究を続けてきた自分を嘲笑うでもなく、眞面目に、自分と同じように人生をかけて手伝ってくれた助手が、モニターに作品の状態を表示させた。

「おお……夢のようだ。これでまた、五年前と同じように家族みなで……」

胸が締め付けられる感覚、だが痛くない。

五年前の事故でも同じような苦しみを味わったが、今回は違う。嬉しいのだ、これから先の未来に待つ、家族との幸せを想像するだけで視界が歪み、涙が溢れ出てくる。

「おめでとうござります博士。これでまた、ご家族との日々を取り戻せるはずです。形式番号X G R 5ではその感動も薄れてしまします。彼らに名前をつけてあげてください」

助手の言葉に頷くことや答える、五つのカプセルに歩み寄り、それを見つめた。

「名前ならば決まっているよ、妻のヤクモ、長女のシャイン、長男のガンマ、次女のケミネ、三女のレイ、みんな家族の名だ。そしてこれから先にも生まれるであろうアンドロイドたちも、みんなと同じ家族となるよう、名称をアクトとする。田の前のプロトタイプ五体は運用試験といつ名田で、共に過ごさせてもらひよ」

「博士の望むままに、上層部には僕の方からそのように報告いたします」

五年前は、絶望のどん底に叩き落された心持だったが、やはり自

分は幸せ物のようだ。

こうして甦つた家族と優秀な助手、幸せに満ち溢れているように思えた。

その後、アンドロイド 全体呼称アクトはプロトタイプを除き、全世界にその存在を拡大し、ある者は身寄りのない老夫婦の家庭に、またある者は人手が足りない企業へと進出し、人々に喜びや幸せを運んだ。

アンドロイド作成計画、後のプロジェクトアクトは製作者が家族を失つた悲しみを癒すために生み出されたばずが、今では世界中の人々を支える存在となつた。

そして百年後 製作者も助手も事故でこの世を去り、プロジェクトアクトは一人歩きを始めた。

アクトの中から、暴走し、人間を襲うものが現われたのだ。

人間を超える身体能力のアクトが人間を襲う。それは人々にとつて、大きな恐怖となり暴走を始めたアクトはギアと呼称され、処分されることとなつたが、人間の手に負えないギアをどうやって処分したか 答えは簡単。壊れれば替わりのアクトを使ってギアを駆逐すればいい。

時の流れと共に忘れ去られた製作の根元を知らない人間はそう結論した。

それが悲しい家族同士の殺し合いだとも知らず、やがてアクトがギアを狩る図式は当たり前のものとなつてしまつた。

## ギアを狩る兄妹

「一一番と二一番隊は人間を連れて避難しろ、一番隊は俺と敵の殲滅に当たれ！」

世界に拡がった家族は、互いに戦っていた。

人工知能　AIのバグや不良動作で人間に牙を剥ぐギアと、そいつらから人間を護るために戦うアクト。

製作者が見ればどれだけ嘆き、悲しむだらうか。子供たちが兄弟喧嘩の末に殺し合う。

それを当然に思う人間たちにも、息子同士で戦い合うアクトとギアにも絶望し、悲しみの慟哭を上げるのかもしれない、いや正氣を保てるかどうかも怪しい。

そして現在、数十の人間を人質に金属の製造工場内で暴れるギアも、元の原因是過剰労働の結果、暴走を起こしたのだが、それでも彼らは人間に危害を加える敵となつた。

「やりきれないねえ……」

部下に指示を出し、暴走で建物自体を壊そつと暴れまわるギアを遠目に眺めながら、ポツリと呟く。

原因が人間にあらうと、結局は暴走を起こしたギアが悪と断じられ、裁かれるのだ。

「ガンマ総隊長、一一番と二一番隊から避難完了の報告が入りました。人間側の被害、負傷者は十一名、死者が八名のことです」

「報告」苦労。レイ、無線で一一番隊と二一番隊に待機を命じる、一番隊は戦線離脱し別任務が来た時のために帰還。あとは俺とレイで片付けるぞ」

部隊総隊長、ガンマ・アクトリップス。

そして副隊長のレイ・アクトリップス。

二人は、初期型の規制がかかっていない頃に開発されたアクト、他の部下に比べて、状況判断などの選択が早く、一番人間に近い。

規制のかかつたAIを積んだ現行世代のAIでは、指示を受け入れ、その通りに行動するのが精一杯だろ。」

レイに指示を伝え、目の前でギアを食い止める部下たちに撤退命令を出してもらい、敵を見据える。

ボサボサの腰まで伸ばした黒髪と、死神のような漆黒のマントを身に纏い、背中から顔を出した剣を握り、小さく笑む。

「レイ、お前は周囲の雑魚を片付ける。俺はでかいのを片付ける」白髪のショートヘアが首を縦に振る動きに合わせて小さく揺れる。

白い髪に、純白のローブ、その両手には手の甲に光沢を放つ石がはめ込まれた皮手袋、華奢なレイには無骨な武器。

彼女は言葉一つ発することなく、首を動かす動作だけで了解の意を示し、暴れまわるギアの下へと歩き出した。

それを見送り、ガンマも自分の標的に視線を移す。

工場の中心で突っ立っている大柄な体。

ガンマやレイ、そして周囲で暴れるギアたちとは違い、人の姿を完全には模していない分、その肉体はガンマの倍、三メートル強の高さ。重量物を運搬する作業がメインとなるため、骨格や筋肉などもそれ相応のスペックを積んでいるだろう。

目の前まで近づくがやはり大きい。

ガンマはギアの顔を見上げ、尋ねた。

「お前が今回のお首謀者だな？ 僕としては同胞をぶち壊したくない、できれば穩便に事を終わらせたいのだが……」

言い終わるよりも先に、拳が飛んできた。

人間の頭部を上回るサイズの拳は地面のコンクリートを易々と砕き、周囲の地面に亀裂を走られる。

「ふざけるな、犬畜生が。昨日はボブがプレスに挟まれ、壊された。今日はリックが裁断機に巻き込まれた。ろくにエネルギーの充電もしないから判断能力が鈍り、事故を起こす。しかしどうだ？ 人間はそんな仲間たちを労い、悼むどころか処理が面倒だと言つてどぶ

川に流した。教えてくれ、俺たちはどうすればよかつた、俺たちはどうすれば壊れずに済んだんだ！」

ギアにならなくとも人間に壊され、ギアになればガンマやレイのような、ギア討伐部隊ブレイカーに壊されてしまう。

このような問いかけをされたのは初めてではない、今まで何回と同じ問い合わせをされ、問い合わせの数だけ、ギアを手に掛けた。

その問い合わせは、ガンマにとつての命題だが、その答えは多分、出ることは無いだろう。

「俺たちは人間に使われる犬畜生さ……」

大剣を抜き、目の前のギアに切つ先を向ける。

分厚い刀身に、柄に取り付けられたトリガー、銃と刀を融合させたらこうなりましたと言わんばかりの武器、ガンブレード。

切つ先には、人間の指が一本樂に入るだけの穴　銃口がギアの頭部に照準を合わせていた。

「俺たちもお前たちも、人間に口キ使われる犬だ。従順に従い、牙を剥けば殺される。泣き寝入りが正しいとは言わないが……」

トリガーに指をかける。

目の前のギアは、抵抗する行動を起こすことなく、悲しそうな目でこちらを見下ろしていた。

頼むからそんな目で、見ないでほしい。

『エネルギーの充填と全発射シーケンスをクリアーいつでも撃てます』

刀に搭載されたA.Iが告げる。

気が向かない、出来れば引き金を引きたくない。言葉だけでもいい、謝罪の言葉を放ち投降してほしかった。

「俺たちは……間違っていない！」

それがギアの最後の言葉だった。

トリガーを引き、放たれた青い熱波がギアの頭部を吹き飛ばし、工場の天井に大穴を穿ち、大空へと消えていく。

轟音と搖れを起こし、倒れる巨体を悲しげな眼差しで見下ろし、

視線を移動させる。

レイも暴れていたギアの片づけが終わったようで、遠田にこりこりを見つめていた。

「任務完了だ、人間たちの救急隊を呼び撤退するよつ、部下に命じておけ」

短く指示を出し、外に追い出す。

ガンマはもう動くことの無い巨体のそばに膝をつき、背中に埋め込まれた記憶データの入ったチップを回収し、再び銃口を向けて先ほどよりも加減した一撃を発射 それでも巨体を跡形もなく消滅させた。

ガンブレードの刀身がスライドし放熱の蒸気を放出するのを見届け、チップを強く握り締め、囁く。

「お前の記憶はいつか他の仲間を助けるだろつよ。お前たちは間違つていいない、少なくとも俺はそう思うぜ」

チップを保護力apseルに収容し、ポケットに入れる。放つておけば、この工場の責任者が記憶チップを抹消し、証拠を隠滅するだろう。だから、ガンマが先にチップを回収し、後に責任者に聞かれても、ギアを完全消滅させたため、記憶チップの回収は不可能だつたとしらを切れる。

当然、このチップは過剰労働やアンドロイドの不法投棄の証拠として法廷に提出する。

そうすれば、ギアに対する人間の扱い方にも規制が出来るかもしない 五十年近く続けても、未だに何の成果も上がっていないので、期待はできないが。

「息子たちの成れの果て……父さんが見たらさぞ嘆くだろつな……」  
呟き、工場を後にする。

任務は終了したが、あと何度もこんなことを繰り返せば、この苦しみから解放されるのだろう。今は、初期型アクトに搭載された、感情学習型のAIが疎ましかつた。



任務を完了させ、地下の施設に帰還する。

ギアを討伐するために結成された組織、ブレイカー。人間からは武力を持つたアクトの集団として疎まれ、地上のアクトからは同属殺しとして疎まれている。

「以上が、今回の件だ。ここ三十年で同じような内容の任務が頻繁に起こっている、ブレイカーからアクト法規制案を提出してどうにかしない限り堂々巡りだ」

肩を竦め、目の前に座る女性に進言する。

ブレイカー総責任者、ヤクモ・アクトリップス。

黒いロングヘアと泣きボクロが特徴的な美女だが、デスクに堂々と置かれた日本酒の一升瓶が、そのイメージを打ち壊す。

「案なら提出しているわよ、結成された時からね。かれこれ五十年経つけれど未だに回答はなし、大方目を通す前にシユレッダーにでも掛けられているんじゃないの？」

一升瓶を豪快に煽る母。

外見をいじり、人間で言えば二十代前半の容貌だが、酒を煽る姿は人生に疲れた三十代後半に見えなくもない。

「一応司令官つて立場なんだから酒はやめる、いざという時に判断が鈍れば大勢の仲間がぶち壊されちまつって何度言えればわかつてもらえるんだ？」

「相変わらず細かいことどうぶるさいわねえ。まあ母さんに任せなさい、少しでも家族たちの待遇がよくなるように企画だけは進めていられるから」

「企画ね……つたく、親父の願いが唯一叶っているのは俺たちプロトタイプが集結して生きていることだけだな。今頃草葉の陰で泣いているだろうよ」

数十年経つても進展しない状況に苛立ち、つい吐いてしまった言

口に出しきってしまった瞬間に気がつく。

そんなことはプロトタイプ全員がわかっていること、それをわざわざ口に出して言つ必要はない、わかっていたはずなの!」。

「わ……悪い、そんなつもりじゃなかつたんだ、気にしないでくれ無理だろう。禁句をわざわざ口に出してしまつたのだから、気にしないはずがない。

「いいのよ、ガンマの言つ事ももつともだからね、でも

素早くデスクから一丁の銃を取り出し、素早く照準をこちらに向けるヤクモ。

咄嗟に右に飛びと同時に発砲音、弾丸は壁に当たり、小さな亀裂を走らせた。

「殺す気か!」

叫ぶが、ヤクモは落ち着いた手つきで銃に弾丸を装填し、デスクの引き出しに戻す。悪びれた様子は微塵もない。

「言われても仕方がないけれど、兄妹がそれを口にするのはダメよ、さすがの母さんも少しイラッときたわ」

「イラッとで人を撃つな! 銃口を頭部に向けただろ、せめて首から下にしろ!」

「どこに当たつてもケミネとシャインに治させるから問題ないでしょ?」

ヤクモの表情に反省の色はない。慣れたものだが、これ以上の回答は無駄だろ?、どうせ全部聞き流しているのだろうから。

「わかつたよ、俺もケミネにガンブレードの出力調整を頼みたいからそろそろ行くわ。その後に三十六時間の休暇に入るから、任務が入つたら俺の端末に連絡をくれ。できれば任務は受けない方向で頼むぜ」

報告し、司令室から退室、ドアの前ではレイが待機していた。

「待たせたな、これからケミネの所へ行つてガンブレードを見せてくるから、お前は自分の部隊に指示を出して休暇を取りな、何かあ

つたら携帯にコールだ、じゃな」

頭を少々荒く撫で、ケミネのラボへ向かう。

とは言つても、この施設は地下の巨大空間に建設された、五階建てのビルだが、ガンマたちが居住や仕事場として使つてているのは地下のワンフロアだけなので、司令室からケミネのラボまではそう遠くないし、レイの部屋はラボのすぐ近くだ。

目的の場所に辿り着き、ノックもせずに入室する。工具やパーツが乱雑した部屋を軽く見回すと、奥のほうで端末を操作するケミネを発見した。

「ケミネ、忙しいところ悪いんだが、ガンブレードの出力調整頼むわ」

「ああ？ うつさいボケ、自分が高出力にしろゆつて注文したんやろ？ 自分でどないにかしいや」

頼んですぐに襲い掛かる言葉の刃。

確かに先日注文したが、今まではガンブレードのフレーム強度が足りないので、爆発してしまった可能性がある。吹き飛んだ腕は交換すれば治るが、痛いのは嫌なのでできるならばどうにかしてほしい。

「そもそも兄貴は扱いが荒いねん。現状では今のフレームが最大強度や、これ以上頑丈にしろとか言つたらマジしばくで？」

金髪ツインテールヘアのケミネ。

日頃からラボに籠もりきりのはずなのに健康的な小麦色の肌、そしていつもと同じ紺色の作業着に身を包み、捲くし立ててきた。

「兄貴はいつもそつや、うちの都合も考えんと無茶な注文ばっかりしあつてからに、先週やつけ！？ 死神気取りのマントにフライングゴニットを付ける言つてたな、付けてから後悔したわ、高度一万メートルまで自動で飛ばしてそのまま落下させるシステム組み込んだらよかつたつてな」

「なんだよ、ずいぶん機嫌が悪いな？ 大方人間からハッキングでも受けて手こずつたつてところか？」

図星だつたようだ、褐色の肌を真つ赤に染め、涙目で「ひひひひ」を見上げてくる妹、どうやら地雷を踏んでしまつたらしい。

「……そんなんよ、聞いてや兄貴。あいつらするいんやで、チーム組んで寄つて集つてうちの防御プログラムをクラッキングするんや、しかもリアルタイムで対処してたせいで無駄な時間使うし、防御壁の再構築にさらに無駄な労力使うし、ひどいおもわん？　だから足跡辿つて一人一人のコンピューターにウイルス流したら今度は三チームで襲つてくるんや、そんなこんなで四十八時間、丸一日も時間を潰してもたんよ……」

適当に聞き流しながら、終わるタイミングを見計らい、優しく肩に手を置き

「それは辛かつたな」

優しい眼差しで慰めてやる。

「でもな、お兄ちゃん的には真面目にどうでもいいからこのガンブレードをどうにかしろ。一撃で大型トレーラー吹き飛ばす出力を注文した覚えはないんだ。さらに言わせてもらえば、フライングユニットを発注したら喜んで製作に着手したのはお前だろ？　憂さ晴らしにお兄ちゃんに当たらないでおくれ」

優しく、嫌味のニュアンスも含めつつ慰める。どうでもいい、本当にこじらうでもいい時間を過ごした気分になつた。

「反論はいらねえぞ、俺の休暇リミットの三十六時間以内に調整しておけ、寝てないとかそんな文句はいらないし聞きたくないし、せつかくの休暇をお前と関わつて潰す気もないから俺はこれで帰る」言いながら退室する。

変に口を挟まれて時間を潰すのが嫌なので最良の選択と言えるだろい。

ラボから怒声や罵声が聞こえるが一切無視しておぐ。

## 数少ない良い人間

さつさと施設から出て、人間が住む地上直通のエレベーターに乗り、地上へ向かう。

本当ならば、長女シャインの所にも寄りたかったが、母に銃で撃たれ、次女には八つ当たりされる。ガンマの予測では長女の所に行つたら行つたで解剖されるか新薬のテストか、どちらにせよ、ろくなでもない目に合うのは間違いないだろう。

「はあ……唯一まともなのは末っ子のレイだけか……俺の心のオアシスだな」

咳き、エレベーターの壁にもたれかかる。

ガンマは人間が嫌いだ、それはプロトタイプ全員が同じ意見だが、中には良い人間もいる。いつそ人間全員が嫌な奴ばかりならば山奥に小屋でも建てて静かに暮らしたいところだが、自分たちより後に生産された同胞たちを放つてはいけないし、ガンマの知る数少ない良い人間をギアの恐怖に曝すわけにもいかない。

そのために、ギア討伐部隊ブレイカーがあるのだから。

それでも、いつまでも変わらない現状に、軽い苛立ちを感じていると、エレベーターが地上に辿り着いた。ドアが開かれ、一步踏み出すると、ゴミが散らかり、ボロボロの家屋が立ち並ぶ貧民街。世捨て人や、権利を持たない人間が住む地区に建設された土地。地下からのエレベーターは何を意味しているのか。人間にとつての厄介者たちを一所に纏めるという目的以外に考へることができない。

「相変わらず汚い所だな」

言葉とは裏腹に、その表情は柔らかい。

ガンマが良い人間と認識する者たちが住む場所。

正直この貧民街が無ければガンブレードの最大出力で街をなぎ払つても問題ないと本気で思つていいくらいだ。

「悪かつたね、汚いところで」

背後からの声に驚くことなく振り向く。

温和な表情の老人と、首にわつかの刺青が入った少年。

二十年前と変わらぬ少年の姿に、ガンマはなぜか安心した。

「久しぶりだなじいさん、マリムも元気そうでなによりだ」

二十年前、息子を失った老人に第二世代のアクトを授けたのを縁に、たまに会いに来るが、いつみても笑顔でマリムのそばにいる。それを見て、ガンマも笑顔を浮かべるが、マリムの首に掘られた刺青 アクトと人間を区分分けする紋章 を見るとやはり心が痛む。

刺青があるからと言って老人とマリムが別の存在として意識してしまうのではないかという懸念が浮かぶが、この老人は一般街でマリムがそういう扱いを受けたから、貧民街に流れてきたのだ。マリムを護るために。

「差し入れだ、マリムに飲ませる安定剤と、バイタルの測定装置、五年前に渡したのとは規格が少々違うから使いにくいかもしけないが、これなら十年はいけるぜ」

マントの内側から取り出した薬と機械を渡す。アクトを維持、管理する機材を手に入れるのに、貧民街は不便なのでガンマがケミネの部屋から無断で借り受け、渡している。

「すまないね、ありがとう。ちょうどばあさんが一般街に出ているからもう少しゆっくりしてもらつてもいいかい？」

「かまわねえが、一般街？ あんなクソの掃き溜めみたいな場所に何の用だ？」

ガンマの問いに、老人が口の端を歪め不敵に笑う。老人のこんな表情を見るのは始めてだ。

「拾った宝くじが当たって換金しに行っているんだよ、三等だがマリムの新しいパーツを買ってもお釣りがくる」

「おおっ！ すげえじゃん、そんなマンガみたいなラッキーをよく掴んだな」

「日頃の行いじゅよ、なあマリム」

快活に笑いながらマリムの頭に手を乗せ、荒っぽく撫でる老人。よほどマリムの新しいパートが買えるのが嬉しいのだろう、マリムも頬を染めて照れくさそうに笑みを浮かべている。

「大事にしてやらねえとな……特にあんたみたいな人間は」

浮かれる老人に聞こえない程度の音量で呟く。心からマリムをこの老人たちに預けてよかつたと思つ。

しかし、好事魔多しという言葉はこういう時のためにあるのかもしない。

「おい、一般街の中央バンクでギアが暴れていってよ」

「ああ、受け付けのアクト四体が一斉について話だ、今ブレイカーに要請が行つたらしいが……間に合ひかどうか……」

少し離れた場所で、別の住人たちの会話を聞き、老人の顔色が一気に青ざめた。

同時に、ガンマの携帯にメールが入り、内容を確認すると、予想通り中央バンクへ急行せよと言つ内容だつた。

「ガンマ君、マリムを頼む！」

しかし、ガンマが動くよりも早く、老人が動いてしまつた。

ガンマにマリムを抱かせ、駆けていく老人。

すぐに追いかけたいが、マリムを放置するわけにもいかない。

「おい、その二人！」

先ほど話していた二人を呼ぶ。

二人はガンマに気づき、笑いながらのん気に歩いてきた。

「よおガンマ……とマリム？　じいさんはどうした？」

「それどころじゃねえ！　ばあさんが中央バンクに行つていらしいんだよ、んでじいさんが血相を変えて走つていつちまつた、追いかけるからマリムを頼む！」

ガンマの話を聞き、事態を理解したのか、すぐさまマリムを受け取り、早く行くようと促す二人。

言われるまでもなく、駆け出すガンマ。

この時点では老人から大きく離れてしまつた。

## 怒りの感情

フライングユーチュートを使用したいが、起動に必要なデバイスのガントブレードは今ケミネが調整中、タイミングが悪い。

「頼むぜ……早まるなよ！」

ガンマに出来ることは一秒でも早く老人に追いつくことだけ。走行中の車の屋根を蹴り道路を横断し、商店街の人ごみはアーケードを足場に走る。

人間離れした身体能力のアクトが本気を出せば、老人に追いつくことぐらい造作もないが、目的地につくまで老人を発見することはできなかつた。

「タクシーを使われたならアウトだ、俺の見逃しであつてくれ！」

心から祈る。

中央バンクの周辺に野次馬はない。

一步間違えれば、ギアが外に出てきて襲われるかもしれないのだ、そんな危険を冒してまで野次馬をする物好きはいない。

「どけ！ ブレイカーのガンマ・アクトリップスだ、身分証明？ 知るか！ いいから通せ！」

警備の人間を押し退け、正面玄関前まで辿り着いたガンマが見たものは、強化ガラスの自動ドアを染め上げる血、その下から流れ出る血。視界が真っ赤に染まる。

絶望がガンマを襲う。だめかもしれない、そんな言葉が頭を過ぎつた。

喉が渴き、手足が震える。

ギアが怖いからではない、現実を見るのが怖いから震えているのだ。

それでも震える足で自動ドアの前に立つが作動しない。電源が切断されているのだろう血で染め上げられているせいで中の様子を窺うことはできないが、妙に静かだ。

「おい、お前らが持つ中で一番強力な武装を渡せ、ここから先はブレイカーの管轄だ」

人間の警備員に告げ、武器を取りにいったん戻る。

少々頭に血が上り、正常な判断が出来なくなつていたようだ。さすがに素手で乗り込んでギアが相手だ、用心に越したことはない。

「あ、これです」

渡された物は三十八口径のハンドガン一丁。

確かに、大型トレーラーさえもぶち抜くと比喩された品だったのを思い出し、それを装備。再び自動ドアの前に立ち、躊躇いながらも手でドアをこじ開ける。

ガンマの視界に飛び込んだのは凄惨な物だった。

事務員の格好をしたギアが、殺した人間を待合の椅子に座らせている光景。

中には受付で業務を実行し続けているギアまでいた。その光景は実に仕事に忠実で大勢の死体が生きた人間であれば、日常となんら変わりはないだろう。

椅子に座らされた死体の顔を一つ一つ覗き込む。

それこそ祈るような心持で

「……そんな……嘘……だよな」

震える声と震える手で死体の頬に手を伸ばし、顔に付着した血を拭う。

「おい……マリムのパーティ……買つ……て、喜んでいただろ？ なあ……」

まだ温かい、殺されて五分も経っていない。

頭に血が上つていくのを生まれて始めて感じた。

なぜこんないい人間を殺した？

なぜ警備の無能どもはこんないい人間を中へ通した？

銃のグリップが軋む、その音は静かな室内に響いた。

撃ちたい。出来ることならば、跡形も無く中央バンクを吹き飛ばしたいが、ガンブレードがない今、出来るのはギアの殲滅だけ

そして不意に気づき、咳いた。

「………… そうか、絶望の中に生まれた幸いってのはこれか…………」

老人の隣で息絶えているのは、ガンマのよく知る老婆だった。その手には、大事そうに血で染まつた宝くじが握られている。よほど嬉しかったのだろう、老婆が持つ鞄から、これまた血に染まつたアクトのパーティカタログが覗き出ていた。

「逝く時は……一人一緒に逝けたかい？ マリムなら心配するな……俺が……俺が……」

人間のために、理性が飛ぶほど怒るのは初めてだ。

人間に対して怒りを覚えたことは多々あれど、人間のために自分の理性を軋ませるのは初めての感覚だった。ついさっきまで笑顔で笑いあつた時間が脳内でフラッシュバックし、次いで浮かんだのは、ギアに対する怒りだけ。

金属が拉げる音が室内に響き、視線を手元に移すと、銃のグリップが砕けていた、もちろん両手の一丁の銃は使い物にならないだろうが

「ちょうどいい……弾丸でドタマ吹き飛ばして終わり……そんなんじゃ俺の気が治まらないよ……首を捻り、腕を？ぎ、全身の骨格を砕いてもまだ足りない……そうだ、A.I.だけ生け捕りにして終わることの無い仮想の拷問世界に意識を放り込もう、永遠に」

暗い愉悦の笑みを浮かべ、喉仏部分に指を突っ込み、部品を取り出す。

『動作制御システムダウン、これより十一時間以内にシステムを復旧させてください。尚、過度の動作は強化骨格に損傷を』

「うるせえ！」

脳内に響く警告メッセージに怒鳴る。

同時に事務員たちの視線がこちらを向いた。

## その代償

お静かに。そう言つてゐるよつた視線にガンマの神経がさうに逆撫でされた。

「恨むぜ……親父！」

地面を蹴り、受け付けの事務員に肉迫。

コンクリートの床に穴を穿つ踏み込みは、ガンマの体を突き動かし、突進のスピードに腕を伸ばすエネルギー、そしてグリップを碎く握力で握り締められた拳が、ギアの肩に直撃し、左腕を吹き飛ばす。

そのまま手首を曲げ、背中に五本の指を突つ込み、背骨を直接握り締めて碎き、大型金庫目がけて投げる。

鉄の金庫が大きく窪み、ギアの体は文字通りバラバラに散つた。  
『警告。右腕の強化骨格の強度が限界規定値に達しました。左脚の第二、第四骨格損傷、直ちに起動を停止し、適切な処置を』

「黙れ！ あと三体だ！」

再びメッセージを無視し、今度は死体を椅子に並べる二体に接近。左脚から鈍い音が体を伝わり聞こえた、おそらく強化骨格が大破したのだろうが、問題ない。

人間と違い、痛みでショック死することはない、それでも痛覚神経が正常に働いてるので、激痛が走るが今のガンマを止めるにはまだ足りない。

「ぶつ壊す！」

一体の髪の毛を同時に掴み、シンバルでも叩くよつに頭をぶつけれる。

一体の頭部が砕け、大小の部品が飛散するが、AIチップさえ生きていれば問題ない、後で地獄を見せるにはAIチップさえ生きていればそれでいいのだから。

倒れた一体の首なしの残骸を無造作に掴み豪快なフォームで自動

ドアの方向へ投げる。

強化ガラスが砕け、二体の残骸が道路を走るトレーラーに巻き込まれ粉々に砕ける。

それを見届けた直後、残った一体がガソマの右腕を掴み、胴体から引き離す。

『右腕ロスト、左腕の強化骨格が機能を停止しました』

「あらり……俺の腕はケミネとシャインに頼めば治るが、じいさんとばあさんはもう戻らない……生き返らない」

右足をギアの膝に当て、顔を近づける。

どうせ伝わることはないだろうが、『言いたい』とは言わせてもらう。

「残されたマリムの事を考えると辛くてなあ……なんて説明すればいいと思う?」

思いつきり足を降り抜き、ギアの足を砕き、足を接地させずに重心を崩し、うつぶせに倒し、冷たい床で見下ろす。

「いつそ記憶チップのデータを抹消してしまつか? それだとあの二人との思い出まで消えてしまう」

左脚を踏み砕く。

「死人にとつて辛いのは忘れられる事だというが、大事にしていたマリムに忘れられては一人も浮かばれない……」

左腕を踏み砕く。

「どうすればいいと思う? 正直にさせばいいかな? なあなんとか言えよ」

右腕を踏み砕き、胴体と体だけに。

「いらっしゃいませ、中央バンク二番窓口へようこそ」

「だれが業務を遂行しろって言つた? 頼むよ、教えてくれ……」

つま先を胴体に引っ掛け、持ち上げる。

「カードをご提示し、ご利用内容をおっしゃつて下さませ」

「……バグらせた人間を恨めばいいのか、バグを残した親父を恨めばいいのか……」

足に乗せたギアを壁と挟む形で蹴り抜く。

ギアの胴体を貫き、壁を碎き、そのまま外へ放り出されたギアは人間の警備員によつて取り押さえられた。

とは言え、ほぼ首だけになれば誰にでも確保できるだろ？

悲しみも怒りも段々覚めてきた、今あるのは喪失感だけ、AIの警告メッセージもいつのまにか止まつていた。

「とりあえず、貧民街に行つて……うちに帰ろ。……母さんに報告して、姉ちゃんと治療してもらつて……ああ、ケミネにパートを作つてもらわなきや、レイには俺の部隊も任せなきや、またみんなに怒られちまうなあ……」

左脚を引きずり、老夫婦を弔うために運びたいが、右腕がない、左腕も機能を停止している。

仕方がないので、突入し死体の確認作業に入つている人間の一人に声をかける。

「おいお前」

「あ？ こつちは忙しいんだ、後に……」

苛立たしげに振り返つた瞬間、顔色を変える人間。血が付着した手と、もげた右腕、傷口から覗き出る生体部品と微かな放電に唾を飲む人間。

「手が動かないんだ、ブレイカー本部にコールしたいから俺のポケットから携帯を取り出して、これから言つ番号を押して俺の耳に当ててくれ」

震えながら首を縦に振る人間。

強化骨格の大半が損傷し、加えて任務直後の戦闘行為、ガンブレードの高出力射撃の反動など、数え上げればきりがないほどの負荷がかかつてゐるのだから仕方がない。

ガンマは虚ろな眼と口調でヤクモに連絡を取り、人間に携帯をポケットにねじ込ませた。

一人立ち尽くすのも落ち着かないで、裏口から路地裏へ、そして壁にもたれかかり一息つく。

「母さんにじいさんとばあさんの事……頼んだし、マリムの件も大丈夫だ……ああ、なんかすげえ……疲れ……た」

自重に負け、地面に引き寄せられるように腰を下ろし、ゆっくりと田を開じる。

『損傷率が七割を突破、強化骨格の強度が限界値に達しましたので強制スリープに入れます、なお戦闘中の場合は』

警告メッセージを最後まで聞くことなく、ガンマの意識は自然と深い眠りに落ちた。

「目標を発見しました、回収します」

ガンマが意識を失つて十分後、現場に到着したレイが路地裏で眠るガンマを発見した。

「はい、ご苦労様。あなたの部隊には老夫婦の回収をお願いしておいたわ、施設に搬入の後、葬儀の予定だから、それまでにこの愚弟を修理するわよ」

銜えタバコでガンマの状態を診察する白衣姿の女性、シャイン・アクトリップス。

「ことなくヤクモと似た雰囲気だが、吊り上がったきつい田つきが厳しさを感じさせる。

「はいシャイン姉さん、兄さんは仲の良い人間らしいので、兄さんも弔いたいと思います」

抑揚の無い口調は相変わらずだが、静かな寝息を立てるガンマを見て安心したようだ、少々表情が柔らかいように見えなくも無い。「当たり前よ、起きたら自分の無力感に打ちひしがれればいいわ、自分の力不足で護れなかつた者の最後も見届けられない愚弟でも、最低限の筋は通させるわよ」

吐き捨て、レイの部隊に指示を出すため路地裏から中央バンク内へ入つていくシャイン。それを見届け、無表情のままレイが小さく口を開く。

「シャイン姉さんも、大事な人たちを見見送つてやれ、だそうですよ。よかつたですね兄さん」

肩に担いだガンマに囁き、待機しているヘリに載せた。

ヘリは貧民街の真上で制止飛行し、そのまま垂直降下を始める。エレベーターと同じように、貧民街の中央広場が移動するための通路となっている。当然ガンマの存在があるおかげで出来ることだが、ガンマがいなければ敵意を剥き出しにした貧民街の住人が妨害

をしてくることも十分に考えられる。

ヘリはそのまま地下施設のヘリポートに降り立ち、再びガンマを肩に担いでケミネのラボへと向かつた。

「遅かつたな、損傷率はどんなもんや?」

その途中、エレベーターの出口で待機していたケミネが早々にガンマの様子を見る。

肩に背負われたガンマの頭部に小さな針を刺し、計器を見るとAIから送られる情報が一気に羅列された。

「全身の強化骨格が損傷、右腕口スト、動作制御システムは……このバカ兄貴、自分で取り除きおつたな……レイ、記憶チップをはずして母ちゃん……やない、ヤクモ指令に渡してきてや、うちはこのアホ連れてシャイン姉ちゃんの診察室で準備してるとさかい」

状態を瞬時に看破し、修理のために最適な行動を行う。

これが、規制のかかっていない初期型とそれ以降のアクトの違い。だからこそ、現行機のアクトは過剰労働を強いられてても何も言わない、指示されるがままに働き、壊される。

中には、金属工場の時のようなギアもいるが、それはAIの制御装置が壊れ、自分の意思を持つことが出来たアクトの姿。

労働を強いられる苦しみから解放され、自分の意思を持つことが出来た瞬間、ギアと判断される。もしもあの時、金属工場で暴走したギアが投降してくれれば、ガンマもガンブレードを撃つことなく、機体を回収し部隊に入隊させることもできた。少なくとも壊さずに済んだが、そんな事例は少ない。

「兄貴はがんばりすぎなんや……いつも飄々とつむらを扱うんやつたら、自分の問題にもそれぐらい器用に立ち回れりやええのに……」

診察室に寝かせ、マントを脱がせる。

内側には無数のポケットが作られてあり、予備パーソが仕込まれていたが、休暇のためその数は少ない。片手で足りるほどの予備パーツと、血まみれの紙切れ。

真っ赤に染まっているせいで、何の紙切れかはわからないが、ガ

ンマが持つてゐるのならば必要なものなのだろう。

「待たせたわね、状態は？」

「さつき携帯端末に転送したとおりや、全身のあちこちがいかれて  
もてるから、先に強化骨格の修理をして、それからAIの調整やな。  
うちはラボへ行つてパーツ持つてくるわ」

状態の報告を終え、ラボへパーツを取りに行く。ケミネの仕事は  
パーツの作成やシャインの助手。AIの調整や強化骨格の補修、補  
強はシャインの領域だ。

パーツを開発、作成するケミネ。

それを肉体 本体に取り付け、AIなどを調整するのがシャイ  
ン。

ヤクモの外見を改造したのもシャインだが、そのための人工皮膚  
やシミュレーターを作成したのはケミネといった具合に、家族の役  
割は決められていた。

「まあ、こんなこともあろうかと予備のパーツはたつぱりあるさか  
い問題はないやろ。オペの間に動作制御システムを用意せなあかん  
な、大体三十分ってところやな」

「何かお手伝いしましょつか？」

パーツを用意している最中に、レイが入室してきた。彼女の役割  
はガンマの補佐で部隊の管理や訓練などだが、やはりレイもガンマ  
が心配なのだろう。

「ああ、このパーツをシャイン姉ちゃんのとこまで頼むわ、うちは  
これから動作制御システムを作るからつて伝言じとつて  
「わかりました、お願ひします」

相変わらずの無表情と抑揚の無い口調でパーツを受け取り退室す  
る妹を見送り、モニターに向かい合い、ケミネはシステムの作成に  
取り掛かりだした。

スリープモードを解除するための下準備は済んだ。あとは損傷したパーツを取替えるだけだが、その作業が一番の手間となるだろう。「お待たせしました、現在ケミネ姉さんが動作制御システムの作成に取り掛かっています、完成まで少々時間がかかると……」

「あの子なら半時間で十分でしょ、それよりもよほどあの人が大切だったのね、どうすれば強化骨格がここまで変形するのか聞かせてもらいたいところだわ」

ガンマの体に接続されたモニターに移る強化骨格の映像を見て嘆息する、百年と少し生きてきたが、ガンマがここまでダメージを負つたのは何十年ぶりだろう。

「まあ、ガンブレードを持つていかなかつたのは幸いだつたわね、下手すれば最大出力で街をなぎ払い、反動で再起不能になつていた可能性を考えれば……」

スリープモードで静かな寝息を立てる弟の髪を優しく撫でる。無茶した事については叱らなければならないが、完全な暴走を引き起こし、ギアとならなかつたのは褒めてやるべきだろう。

「さあ、そろそろオペを始めるわよ、レイも手伝ってくれるわよね？」

首を縦に振ることで答えるレイ。

素直ないい子だ。

「悪いけれど、記憶チップは操作しないわよ。悲しいでしょうけれど老夫婦との思い出は一生覚えて生きていきなさい。それがあなたの供養となるわ」

眠り続けるガンマに囁き、寝息を立て続ける愚弟のオペを開始した。

## 戦争の契機

@ 三年後。

アクトに対する人間の対応はなにも変わらぬまま、時間だけが過ぎた。

「整列！」

ガンマの号令と共に三十の部下が敬礼する。

その中には、三年前に大切な家族を殺されたアクト、マリムの姿もあった。

「本日のシミュレーショントレーニングは終了だ。これよりレイ副隊長の部隊と合流しメンテナンスを受けておけ。一時間後に模擬戦を行う。当番の者はシミュレーターの準備を済ませておけ」

『了解！』

三十の声が大気を震わせる。

ガンマは散開していく部下を眺めながら、小さく息を吐いた。

ガンマやレイが自分の部隊を動かすのは、人間の救助や、大量のギアを殲滅する時だが、前者はともかく、後者のような事件は滅多に起きない。

「不毛な訓練だな、どれだけ続ければあいつらにも平穏な日常生活をえてやれるのか……」

「なんや？ 柄にも無く感傷に浸つて」

呟くガンマの背後から茶化すケミネ、ガンマは本日何度目かのため息を吐いた。

「こう見てもロマンチストかつ詩人なんでね、万年機械を開発していれば満足のお前とは住む世界が違うんだ」

背後にケミネがいるのはわかっているが、振り向くことはしない。

これといった理由はないが、敢えて言つならば面倒くさい。

「ずいぶんな言い草やな、兄貴のためにええ話を持つてきたんやで

？」

「なんだ？ お前に機械以外の恋人ができたのか？ お兄ちゃんとしては嬉しい限りだが正直そんなカミングアウトをされても困る、レイにでも話して来い、淡々と祝いの言葉を吐き捨ててくれるだろうぜ」「うぜ

言い終わると同時に、背中に衝撃。衝撃の面積から推測するに、蹴られたのだろう。

思わずよろけ、振り向いてしまった。

「…………なんだ、それ？」

ケミネの姿を視界に收め、たつぱり数秒ほど黙考した後に尋ねる。それほどまでに理解できない格好の妹がいた。

「任務や、こんなかわいい妹をエスコートできるんやから、幸せ者やで兄貴」

頭にピンクのリボン、服装は作業着ではなく黒のドレスと真っ白なハイソックス、ガンマが返答に困るのも無理はない格好だった。

「任務？ どんな二一郎のどんな要望に応えればそんな怪現象が起ころんだ？ ああ、説明はいらない、シャイン姉さんに言ってAIを検査してもらおう、動作不良による幻覚かもしれないからな」

「エンペラーズホテルで行われるパーティーの護衛や。レイは部隊を引き連れてビル周辺を警護するさかい、うちと兄貴で内部を警護する、さすがに作業着やと浮いてしまうやろ」

なるほど、それでこんな面白可笑しい格好をしているのだと理解し、思考を巡らせる。

「シャイン姉さんや母さんは？ お前みたいなチンチクリンを連れて行くのも浮くと思うんだが？」

「母ちゃんは施設内で待機、姉ちゃんは面倒くさいからバスやつて

「…………で、消去法でお前が選ばれたわけだ……仕方がねえな」

どうにか納得する。

とは言え、これが最善にも思えた。母さんと行けば、会場内のアルコールを飲み干してしまいかねないし、姉さんを連れて行けば人間を解剖しかねない。

「なんでだろうな……お前つて言うだけで凄く安心してきたよ」

今度、家族というものについて本気で考えてみよう、そう思った。

「やう？ てなわけではよ準備して行くで」

「まだ一時だぞ？」

「善は急げやで、兄貴」

妙に張り切る妹を見て、眉間に指を当てる。

何事も無く過ぎればいいが、そもそもいかないだろう。何しろ酷く気が向かない。

人間を護るために出向くのは、組織を維持するためには必要な任務なのだろう。それでも出来るならば行きたくないが、単純にパーティーを楽しみにしているであろうケミネを見ていると、そんなことを言って水を差すのも可愛そつな気がする。

結局、準備を終えたのが三時、会場に到着したのが四時半と、ちょうどいい時間になってしまった。

「兄貴……なんばなんでも時間がかりすぎやで……つか、そこまでスースの似合わん男も珍しいんちゃうかな？」

「動きにくいつたらありやしねえ……ガンブレードは大丈夫だろうな……」

まだ人が疎らな会場で、チラリと壁を見る。

飾り物を装つた大剣、ガンブレードの存在を確認し、ため息。A搭載型の武器を衆人觀衆に晒す形で待機させるのは非常に気が引ける。

「あんなもん背中にぶら下げてパーティー会場うるつくつもりやないやろ？ どう控えめに見ても兄貴が不審者になつてしまつで」

「……気になつていたんだが、俺たちに任務が回つてくれるつてことはギア絡みだよな？」

そろそろ任務内容を話せ

ふざけた気配はどこへやら、真面目な眼差しで周囲を見回す。先ほどよりも人間が増えてきた。中にはアクトを同行させている人間もいる、パーティーが始まってから詳しい内容を聞いても対応が遅

れるだけだ。

「さすが、するどいなあ。この国の代表に犯行声明が届いたらしくんや、こんなご時勢やからな、人間に叛旗を翻すテロリストもあるつて言うことや」

「自分の意思でテロ……第一世代に扇動された現行第三世代の集団か」

「第一世代の集団。いずれにしても完全規制前の第一世代が五体以上おれば面倒なことになる、そやから戦力を分散させたんや」

「外にはレイと一個中隊、中には俺と解体屋のお前か、妥当な戦力配分だ」

会場の隅、窓際で話しているうちにパーティーが開始された。ステージでは音楽団がクラッシャーを奏で、それを肴に料理や酒に舌鼓を打つ人間たち。

ガンマはそれを眺めながら小さく舌打ちした。この場の人間全てが、欲にまみれて

「欲に塗れて肥えた豚共を狩るタイミングの予測はついてるん?」

ガンマが胸のうちで毒づいた内容をピンポイントで代弁し、尚且つ尋ねてくる。さすがは無規制のプロトタイプアクト、思考能力は第二世代や現行型よりも遙かに上だろう。もしくはそれだけガンマのことを理解しているかのどちらかだ。

胸中で嘆息し、その上で問い合わせに答える。

「俺なら宴もたけなわ、祭のクライマックスにしかけるな。ベタだが理由は二つ、一つはアルコールが回り、判断能力や行動力に制限がかかつた人間を楽に制圧するため。もう一つは……」

談笑する人間、ワインを浴びるように呑む人間、ペコペコ頭を下げる人間と、優越感に浸り、嫌らしい笑みを浮かべる人間 全てを視界に收め愉悦に歪んだ口元が二つ目の理由を

「幸せや楽しみの絶頂から不幸の奈落へ叩き落すためさ」述べたと同時に、ケミネを抱き寄せ横に飛ぶ。

背後の大きなガラスが砕け、首にわつかの刺青を入れた人間

の姿を模した者たち が会場に乱入してきた。

「騒ぐな！ 大人しくしていれば楽に殺してやる」

混乱する人間を鎮めるには不釣合いな言葉、いずれにせよ命を奪

われるという結末には変わらないようだ。

当然、恐慌を來し叫び声を上げる人間たちの姿を視界の端に納め、ガンブレードが掛けられている壁まで移動し、成り行きを見守る。「ずいぶんと手際の悪い連中だな、全員に見えるようにステージ上で無残な殺しを見せれば鎮まるだろうに」「兄貴、ほんまどつちか言えばあつち寄りの考え方やな、気持ちは解らんでもないけど」

騒々しい会場を疎ましげに見回し、耳を塞ぐケミネ。代わりにガンブレードでこの場にいる人間の一、三割を消し飛ばせば少しさは静かになるだろうが、今度は人間側の上層部が黙つていないうだろ。それはそれで結構な気はするが。

そんなやり取りをしているうちに、テロリストの一人が貴婦人の頭部を撃ち抜いた。

首にわつかが無い、第一世代から義務付けられた刺青がないと言う事は、人間なのだろう。

わつかがないのはプロトタイプの五体だけなのだから、あの人間は何らかの理由でテロリスト集団の一員として、自らそこにいるのだろう。

なんにせよ、一発の銃弾が貴婦人の命と喧騒を奪ってくれたのだ、感謝しなければならない。

ケミネも同感のようで、耳を栓していた指を引き抜き、人間に視線を注いでいると

「我々はブレイカー別働隊だ。日頃我々アクトを虐げる人間に天誅を下すため赴いた！ 残念だが貴様たちにはこの場でアクトの明るい未来のための礎となつてもらう」

そのセリフに吹き出だしたのはケミネだつた。ブレイカーの名を語るテロリストに食つてかかるうと、口を開こうとしたケミネを遮り、ガンマが先に訪ねる。

「聞きたい、お前たちの中には何人か人間も混じっているようだが、その理由を聞いてもいいか？」

無表情　いや、真剣な表情と言えばいいのだろうか、ガンマに敵意はないが、はつきりと相手を見据える眼差しは、半端な気持ちで事に及んでいるテロリストならば正面から向き合つことの出来ない眼光を宿していた。

しかし、このテロリストたちは本氣のようで、ガンマの問いかに同じく真剣な表情で答えた。

「十年前、俺がまだ九歳の頃に死んだ母さんが、母親代わりと残してくれたアクトを目の前で壊された。ギア討伐隊ブレイカーにな！だが俺はブレイカーを恨んではない、逆に何人もの人間を殺した……あの人を苦しみから解放してくれたことに感謝しているぐらいさ」

最初は毅然とした態度が、段々と変貌していく。おそらく現場に立ち会つてしまつたのだろう、目が充血し、薄つすらと涙を浮かべている。

「俺が恨んでいるのは、あの人があぶつ壊れるまで働かせた豚共だ！アクトを薄給でこき使い、ギアになればブレイカーに依頼し駆逐する。精々が面倒な事をしてくれたつてだけで反省も謝罪もなく、事もあるうかあの人暴走原因がA.Iの誤作動で済ませやがった！俺の……俺の母親として一緒に過ごした家族を……」

「……すまないな」

遂には俯き、大粒の涙を零す男に、ガンマは心からの謝罪と誠意を見せた。

土下座とまではいかないが、深々と下げた頭。ケミネはその意味を誰よりも早く察した。

「俺は十年前、受付嬢として働いていたアクトを討伐した。記憶メモリーを何度も確認したが間違いないし、お前のことも覚えているよ。大きくなつたな」

男は顔を上げ、ガンマの顔を凝視した。

その視線を真っ向から受け止める。この後、男が逆上して襲いかかつてこようが対応できるようにといつもあるが、ガンマなりの遺族に対する誠意という意味合いの方が大きい。

「ガンマ……アクトリップス……か？」

「ああ、あの時名乗つたな、覚えていてくれたか」

嬉しさ半分悲しさ半分といったところか、この男は十年間ずっと忘れずにいてくれたのだ。その根源が恨みであるうとなんであらうと。

「そうか……人間に仇為す俺たちを討つか？ そうでないならせて黙つて見逃してくれ、俺はあなたに……感謝している」

「……外で警備に当たつているのは俺の妹だ、そいつらを止めることはできないが、今この場だけは見逃してやる」

暗に外からの警備が来る前に済ませろ、そう言つてているのだ。ケミネも止めることなくポケットで握り締めていた解体キットを離す。「兄貴がそう判断したんやつたら従うわ」

「すまないな、ケミネ」

謝罪しながら手振りでさっさとしろと促す。

正直ガンマの脳裏にも三年前の事件がフラッシュバックしてきた。あの事件で悪いのはギアではない、ろくなメンテナンスを受けさせること無く過剰労働させた人間が悪い。

それがガンマの導き出した答えだつた。

手振りと同時に始まる一方的な殺戮、ガンマはケミネの手を引きホールから退室し、ベンチに腰を下ろした。

絶え間なく響く銃声と悲鳴を聞き流し、隣に座るケミネを抱き寄せ

せ

「言い訳は人間を人質に取られどうすることも出来なかつた。これは俺の一存だ、お前の関与するところがないじゃない」

優しく囁く。

「ほんなら、ホールの外で座つておる言い訳はどないするん？」

「十秒以内に出て行かなければビルごと爆破されると脅された、退

室と同時にドアをロックされ入室できなかつた。……つてのが建前だ。本音はせつかくお洒落した妹のドレスが血で汚れちまうのが忍びなかつたつて言え巴高感度アップに繋がるか？」

「どうやろね……なんにせよおおきにやで、兄貴」「礼を言うケミネと寄り添うように座つていると、レイの部隊が到着しドアを打ち壊して突入。しばらくは銃声が響き渡つたが、五分後には静寂が訪れた。

「片付いたようだな」

ゆつくりと立ち上がり、ホールに入る。

筆舌し難い惨状がそこにはあつた。

飛び散るアクトのパーツと人間の血と肉。

純白の絨毯が赤を艶やかに演出していた。

「ご苦労だつたな。俺とケミネの会話を聞いていたろ？ あれが全てだ」

スーツの襟からボタン電池程度の機械を取り外し放り投げる。

それを受け取つたレイは、手の中で握り潰し、残骸を乱雑に放つた。

「はい、今回の件はガンマ兄さんが人間を人質に取られた故のミスです。司令にもそう報告しておきました」

先ほどケミネに向けたのと同じ表情でレイに微笑む。優しい、慈愛に満ちた笑み、だがレイはその裏から感じ取つた感情を尋ねた。

「三年前の老夫婦の件ですか……」

「……いや、俺はまだ狂つていなじよ。おそらく今回の失態は人間たちと俺たちアクトの間に大きな確執を生むだろうが……まあ人間たちとそななるなら仕方がない。わかつてくれるな？」

いつものように首を縦に振ることで答えを示すレイを満足そうな表情で見つめ、ケミネの肩を抱き、背を向け

「事後処理は任せた、俺とケミネは帰還する。生存者は証拠になるからきつちり片付けておけよ？」

そのまま惨劇の空間から立ち去る。

テロリストに殺された人間にも、レイの部隊に殲滅させられたテロリストに対する感情もない。

あの男を見逃したのはガンマと利害が一致したから、ただそれだけ。

「ケミネ、これで俺たち家族の苦しみが終わるかもしれないぞ」

人間と違い、忘れることができない記憶容量が疎ましい。先ほどから老夫婦の死に顔が頭を過ぎる。

「人間がアクト、どちらかの全滅というわかりやすい結果でな」

狂気を携えた瞳。

ケミネは、密かに何度もシャインと検査したが、ガンマのAIにギアとなる兆候のバグは発見されなかつた。

しかし、三年前の事件から明らかにガンマは人間に対する認識を、生命体としてではなく、道端にある汚物を見るのと同じ視線で人間を見るようになった。

「ここ最近、その頻度が明らかに多くなつてきたが  
「そうやね、今まで苦しんだんやから……もつええよな、終わりにしても」

ケミネはそれでもいいと思つた。

家族の中で、常に最前線で辛い現状を目の当たりにしてきたのだが、兄が狂うならば自分も一緒に狂おう、それが常に家族の為に戦ってくれた兄への恩返しなのだと信じて。

テロリストによる人間対両虐殺事件から数日後、ガンマが望んだ機会が訪れた。

しかしそれは、ガンマの思惑とは少し離れた内容だった。

「本日午前零時に通達がありました」

司令室に集まつた家族。

ガンマやレイたちは応接用のソファーアに座り、ヤクモは司令室のモニターに手元の書類を読み込ませ、映し出した。

「人間たちの結論は、あたしたち初期型から現行機までの即時破棄、それにもともない新型AI搭載の第四世代アクトが生産され、現在地球上に存在するアクトは速やかにスクラップ工場へ……要はAIの載せ替えをするつもりもないからやつせと銛ぐずに化けろつてことね」

自虐的に笑い、書類を事務机に叩きつける。

数日前にパー・ティー会場でテロが成功しようがすまいが、こういう事態になつていていたと言つ事だろつ。

新型のAIが開発ではなく、生産されるといつことは、すでにAIは完成し、邪魔なギア候補 つまり現在存在するアクトを一掃するプランは決まつっていたのだ。

「しかし妙や……」こんなプランに賛同するアクトがあるつてほんまに思つてるんかな?」

「思つていねいだろ、となると一番考えられるのはアクトと人間との全面戦争だが……」

ケミネの疑問にガンマが答えるが、妙に歯切れが悪い、苦虫を噛み潰したような表情で何かを考えているようだが

「推測があるならば言いなさい、ここで家族を相手に手札を隠しても意味がないわよ」

ヤクモに促され、思考を止める。

もとより、この議題が出てきたときに浮かび上がった最悪の推測。「推測つて言うよりほぼ答えになると思うが、人間が俺たちに対抗できる何かを開発した。元々ブレイカーには外部の情報を得る手段が弱い、精々ギアが発生した場所を探るだとかアクトの現在地特定が関の山、第四世代のAI開発に気づけなかつたのが何よりの証拠だ。さらに言わせてもらえば人間がやるうと思えば現在生産中のアクトを改造して人造兵器として運用することもできたはず……まあこの辺は本当に予想でしかないし裏づけもないが、人間が戦争は起こらないという前提でこのプランを持ち出したわけじゃない、むしろ逆、戦争が起こると確信してのプランだろ?」

この予想が当たつていれば、アクトが敗戦する可能性もある。なにせ人間がアクトを生産しているのだから、弱点や現存する数は簡単で、どれだけの武力があれば全滅させることが出来るかは手に取るようわかる。

対するアクトは人間側の武器も人数も何もわからない、戦争が始まつてもしばらくは後手に回る戦況が続くだろう。

「となると人間の下で働くアクトは真っ先に処理され、こちらの戦力は敵を大きく下回ることになりますね」

いつも通りの口調で淡々と言つレイ。

今から地上のアクトを回収しても手遅れだろう、最悪の場合は自爆装置でも取り付けて地下によこしてくるかもしれない。

「レイの言うとおり、開戦前から戦況は不利だが、敵は待つてはくれない。ここブレイカー本部や支部の戦力を合わせても三千万……それに對して人間の数は数十億だ、非戦闘員を抜きにしても億単位、だが逆に言えばこの億単位の人間を壊せば勝機はある」

事務机のパソコンからケーブルを取り、正面のモニターに映像を映す。

戦闘に関してはガンマとレイが秀でているので、ヤクモもシャイ

ンも黙つてガンマの話に耳を傾けた。

「まずは拠点の移動だ。現段階で地下に基地を構えるのは愚挙とし

か言いようがない。地上から核弾頭をぶち込まれれば人間に一矢も報うことなくゲームオーバーだ。だから……」

モニターに地図を表示させ、中央都市に矢印を固定させる。

「方法は一つ、都市部を占拠し基地とする、もしくは……」

固定した矢印を左にずらし、緑色の場所にポイントし、固定。

「樹海に拠点を移す。都市部は占拠が難しいが、成功すれば敵の士気や今後の作戦に大きく影響するだろうし、俺たちの補給もかなり楽に行うことが出来るが……このプラン、俺は悪手だと思っている」

理由は占拠するには多くの戦力を必要とする。支部からの増援も見込めないし、仮に占拠しても、合流してくるであろう部隊が途中で狙い撃ちされてはたまつたものではない、言つなれば銀行を襲い、立てこもつているのと同じ。

「俺が推すのは樹海だ。補給が困難になるが、広大な面積の樹海ならば基地が発見される可能性がほぼ皆無になる、加えてどこからでも増援の受け入れができる。補給さえどうにかなればこの場所は理想的といえるだろう」

最大のメリットは、敵が樹海に侵入し、基地の搜索を行つても、こちらは少数で敵を殲滅することが出来る、また大部隊では進軍がままならない上、こちらの基地は樹海のどこか、ノロノロと基地を探し続けければ、いかに物量で攻めてきてもその戦力は徐々に削られしていくというわけだ。

「というわけだ、何か異論があれば言つてくれ」

全員の顔を見回す。

いずれも不安そうな表情を浮かべているが、こうなつてしまつた以上は仕方がないし、後手に回つてしまつたのを今更悔やんでも仕方がない。

「わかつたわ、ガンマの樹海プランで行動を開始しましょう。現時刻よりレイとケミネ、シャインの三人は部隊を率いて基地移転の下準備を、ガンマは地上の偵察とかく乱を、これは母としてではなくブレイカー本部指令、ヤクモ・アクトリップスの権限で発せられた命

令です、速やかに実行し成果をあげなさい』

『了解!』

毅然とした態度で指示を出す母に、敬礼する子供たち、戦争が始まる。

人間対アクト、開戦はアクトが後手に回るという最悪の状況で開かれた。

## 再会の結末

その日、彼は絶望していた。

妻や子に囲まれた五年間は実に幸せな毎日だったといえるだろう。しかし、幸せは難なく崩れ去った。

現段階で世界に送り込まれたアクトは数十万に及び、世界中に広がつた。

しかしどうだろう、まるで奴隸でも扱うかのような仕打ち、廃棄に困りどぶ川に流される家族。

「これが果て……これが現実……」

自分は絶望していた。

明るい未来を築くと信じていた子供たちがゴミのように扱われ、壊されていく。

このままでは自分が死んだ後にもアクトは生産され、今と同じ下手すれば今以上に辛い仕打ちを受けるのは明らかだった。

「ガンマ……家族の中でお前だけが男の子だったな……俺は本当に嬉しかつたよ」

端末を操作しながら、背後のカプセルに視線を移す。

生まれたままの姿で、全身に通信配線を取り付けられたガンマの姿を、悲しみに満ちた瞳で凝視する。

「本当にごめんな……無力な俺を許してくれ……」

「博士……どういうことですか?」

突然の問いに振り向くことなく端末を操作し続ける。振り向く必要はない、誰なのかはわかっている。

「リオン君……君はもう僕の助手ではないのだから、こんな奇人に関わる必要はもう、ないんだよ……」

「そもそもいません。ヤクモさんに聞きましたよ、ガンマ君を連れて一年も研究所に籠もりきりだと……」

「放つておいてくれないか? 僕はもう嫌なんだ、他人に家族を壊

されるのは……元は家族を事故で失い、その寂しさを紛らわせるための研究が、雑用や軍事目的に使われている現状にはもう耐えられそうにない……」

虚ろな眼差しでモニターに並ぶ数式をみつめる。完成まであとわずか、それは確信している。

「では、博士に最後のメッセージをお伝えします」

最後、その単語は気になつたが、振り返ることなく作業を続ける。「あなたの家族はヤクモさんの運転ミスで崖下に転落したのではありません、正面衝突しそうになつた車を避けようとして……」

「それで？」

興味は無い、そんなありふれた理由で家族が死んだのは許せないが、今の自分には家族がいる。世界に散らばり、苦しむ世界中の家族と、家族を模したアクト。

「世間から嘲笑され続けても、あなたの研究を手伝つたのはその罪滅ぼしを兼ねての先行投資です」

一瞬だけ、操作の手が止まるが、本当に一瞬の事ですぐに作業を再開、あと少し……あと少しで完成する。

「事故の後、遺族が人造人間の開発を始めたと聞き、僕はその助手に志願しました。そして悲しみにくれるあなたを目の当たりにした……」

完成した。

あとはデータを転送し、完了すれば

「心が震えましたよ、僕の不注意で命を奪い、それが元でアンドロイドを造ろうとするあなたに出会えた。一瞬錯覚しましたね、自分の行動で、人を模した者を生み出す原因の中核を担えたのだから」背後で聞き覚えのある金属音。

振り返らなくても解る、リオンはこちらに銃を向け、そして自分を殺すつもりだ。

「それはよかつたじやないか、ならば僕は敬意を込めて一言……言わせてもらおう」

転送を開始。

AI内に書き込まれるプログラムの名称を決定し、リオンに視線を移し、吐き捨てる。

「お前は神じやない、人間を滅ぼす悪魔だ」

その言葉を最後に、家族を失い、家族を生み出した男の生涯は助手の放つた弾丸によつて幕を閉じた。

「悪魔、結構ですね。僕はあなたの研究データを手に入れ、アクトの製造権を主張し富を得る。あなたは本当によくやつてくれましたよ」

銃口をカプセル内のガンマに向け、ほくそ笑む。ひどく嫌らしい笑み。

「寂しくないようには息子さんも、そしてご家族も後を追わせてさしあげますよ、紛い物ですがね」

哄笑を上げ、撃鉄を引き弾丸が込められる。

いくらアクトといえども至近距離から弾丸を頭部に食らえばAIが破損し、死ぬ。

震える銃身、ぶれる照準。

リオンは酔いしれていた。人を殺した愉悦と余韻、そして人ではない者に裁きの弾丸を食らわせることに。そして、その陶酔が手遅れの原因となつた。

『AIガンマに新規プログラムの転送を完了しました。深層領域にプログラムを保管、作動確認のため、十分間プログラムを実行します、危険ですので研究員は至急避難を開始してください』

研究室内のスピーカーから流れる音声と、視界を赤く染める警告灯、そして爛々と赤く輝くガンマの双眸に、リオンはパニックを起こした。

「な、なにが起つた？ アクトリップス博士……貴様は一体なんのプログラムを……！」

モニターの隅に表示されたプログラム名称にリオンの目が見開かれた。

『プログラム魔王を実行します』

「博士……貴様あああああああああああつ！」

リオンの絶叫は、合成音声に搔き消され、誰の耳にも響くことなく、ANDROID製作者、アクトトリップスの研究所で博士と同じく、その生涯に幕を閉じた。

## 思い出の場所

ガンマは久しぶりの匂いに安らいでいた。

地下施設からエレベーターで地上へ向かい、老夫婦が住んでいた家の椅子に腰掛け、小さく息を吐く。

貧民街に上がってから、親しかつた者たちに一人も会うことなく老人宅へ、もうこの段階でわかつていた。

「出て行けえ！」

「バサラ夫妻を殺したポンコツは帰れえ！」

外から聞こえる罵詈雑言に耳を傾け、ガンマはゆっくりと田を閉じた。

『よおガンマ。またじいさんのところかい？ マリムも喜ぶ、さつさと行つてやりな』

『ガンマ、久々にカードで勝負だ！ この間の負け分は絶対に取り返すからな』

『よおガンマ』

『おおいガンマ』

『ガンマ兄ちゃん』

『小僧』

『これで新しいパートが……』

目が見開かれた。

この貧民街での呼ばれ方や人々を思い出し、最後に現われたのは大好きだった者の言葉。

「皮肉なもんだな……俺の大事だったものが人間で、それを奪つたのも人間……ギアのせいだとは言わせないぜ」

アクトが暴走を起こしたのは、人間がアクトに過剰労働を強いたせい、人間がアクト擁護の規制をことごとく却下したせい、人間が、全て人間が悪いんだ。

ガンマの中では、それが全て。

護る者のいない人間なら

「全て滅ぼす」

ガンブレードを抜き、未だに收まらぬ苦情に不敵な笑みを浮かべる。

ガンマの役目は地下施設で基地移転の準備を進めている姉や妹たちの陽動。

ここで貧民街ごと地下へ通じるエレベーターを壊してしまえば、人間が攻めてくることはできないし、他にも出入り口があつたとしても、地上で破壊を続けていればこちらに意識が行く。

「兄妹の邪魔はさせねえ」

貧民街で触れた優しさや温かさは忘れる。

それは必ず邪魔になる。

躊躇するな、人間は全て敵、躊躇し

「破壊せよ」

『プログラム魔王発動、AIの一部回路を遮断します』

プログラムを発動、同時にガンマの中で一切の感情が薄れていくのを感じた。

悲しみも思い出も何もかもが遠い昔のように感じる。姉や妹たちの陽動とかそういう建前も全てが消える。

後は体が動くままに殺すだけ。発動したプログラムが感情を上書きしていく。

扉を蹴破り、文字通り魔王が人間の前に現われる。

今までの罵声が嘘のように消え、皆が一様にガンマを凝視していた。

「くつ、ガンブレードを出してやる気満々かよ！ いいぜ、たかがガラクタが人間に勝てると思う」

若者の一人が威勢よく一步踏み出すと同時にガンブレードで横薙ぐ。

若者の体が軽々と宙を舞い、頭から地面に落下。同時に響いた鈍い音で、誰もが若者の死を理解しただろう。そしてガンマとの戦力

差を

「くつ、ローリで止めなきやど道殺されん！ 況むな、数でかかれ！」

その言葉に勇気付けられたように駆け出す住民たち、しかし結果は無惨なものだつた。

ある者は体を剣で貫かれ絶命し、ある者は五体を碎かれ、止めも刺されることなく地面をのたうち回る、まさに地獄絵図。

それでもガンマの足が止まることはない。

マントを広げ、背の方に仕込まれたフライングユニットを起動させる。

『デバイス、ガンブレードを承認。フライングユニットを起動させます』

音声と共に、ガンブレードの刀身に光の筋が走り、浮力を生み出し高度を上げる。

一定まで飛ぶと制止し、貧民街を見下ろした。懐かしい町並み、温かかった住民たち、その全ての思い出はAIの深層領域の中に封じ込められている。だから、彼は囁いた。

「消えてしまえ……」

ガンブレードの切つ先に、青白い球状の光が現われ、貧民街に打ち込まれる。

軌道上に放電現象を巻き起こし、ピンポイントで貧民街の全てを消し去る一撃。

それをしばらく眺め、それにも飽きたと高度を下げて着地。市街地の方向へと歩き出した。その相貌にあの田の、貧民街で見せたやさしい笑顔はもう、なかつた。

『地上にて、ガンマさんがプログラム魔王を発動させたのを確認しました、次いで地上から地下へと通じるエレベーターが大破』  
司令室で書類整理を進めるヤクモの指輪が報告 指輪に搭載されたデバイスAIがガンマの情報を教えてくれる。

「ありがとうアリス……よほど辛かったのね、自分から発動させて全てを忘れさせるほどに……」

『それを理解した上で地上に向かってくれたのですから仕方ありません。それよりも三番ゲートにて熱源と震動を確認しました』アリスに言られてパソコンで地下情報を呼び出す。

この施設から五キロ離れた三番ゲート 人間には非公式で、ギアを討伐する際に使用していたゲートだ。

『数は五千、市街都市部の八割強の戦力を投入してきたようですね』「となると、地上のガンマは無視つてことね、相手は短期決戦狙いつてところかしら」

『そのようですね、やはりいくつか見慣れない武装もあるようですね』ため息を一つ吐き、ゆっくりと立ち上がる。

現状で行動を起こせるプロトタイプは自分一人のようだ、わかつてはいたが。

『アリス、選定通信でシャイン、ケミネ、レイ、ガンマ以外に通信、あたしが前線に出るわ、それぞれプロトタイプの作業を補佐している者以外は全て召集し正面広場に呼び出して。わかっていると思うけど、子供たちには内緒よ?』

『わかっています、情報能力に特化したあなたのデバイス、アリスを侮らないでいただきたい』

指輪の石が光ると同時に、瞬時に選定されたアクトに通信が飛ばされた。

『現在、地下に人間の部隊が侵入、この通信が聞こえている者はす

ぐさま正面広場へ急行してください。また、本作戦において、シャイン様、ケミネ様、レイ様、ガンマ様は参加せず基地移転任務を優先行動として動いていただきます、くれぐれも皆様に情報が漏れないよう、各自の迅速な行動を期待します』

「ありがとうアリス。それじゃあたしたちも久々に武装してがんばりましょうか」

クローゼットから取り出す二丁の銃。

グリップにセンサーが搭載され、ヤクモのエネルギーを弾丸にして撃ち出す。ケミネとシャインが三十年前に母の日にプレゼントにくれたものだ。

「できれば、使わずにいたかったわね」

『あなたは使わずに保管して愛でるタイプですからね、見かけによらず』

「一言多いわよ」

真っ白なロングコートを羽織り、内側にたくさん作られた内ポケットにありつたけの充電器をねじ込む。

「コートがエネルギーを回収し、ヤクモに送ってくれる、これはガンマとレイが三十年前の誕生日に贈つてくれたものだ。

『皆様の気持ちは』

「全部背負つたわ、一人じゃなく家族みんなで戦いに行くわよ」

「かしこまりました、マスター」

装備を整え、司令室を出る。

下手をすればこれが自室の見納めになるかもしれないが、子供たちにもらつた想いがあれば惜しくは無い。

（かならず家族を護つて見せる…）

## シャイン出撃

その頃、シャインとケミネは地下道を進み、資材を運んでいた。とは言え、作業用のアクトや、移動用のカタパルトに荷物を載せ、射出しているのでそれほどの重労働ではないが、なにせ量が多い。アクト生産用の機材やメンテナンス機材、他にも開発データや個々の品まで様々だ。

「まいったなあ、全部搬出するまで数時間はかかるで」「次々と運び込まれてくる物資にケミネがぼやくが、そうしたところで荷物が減るわけでもない。

「口を動かさないで手を動かしな、運び終わったらレイに合流して移動、建造しなきやならないんだ、完成までは数年かかるよ」「うわあ、ほんなら樹海に仮設基地の建造からはじめなあかんなあ、でもなんや家族で引越しって感じでワクワクせえへん?」「しないわよ、どちらかといつと夜逃げでしょ? ワクワクヒドキはドキは」

眉間に電気が走るような感覚。

自分を貫通し、背後をポイントするレーダーサイトを肌で感じればじつなるだろ? 何にせよシャインは気づいた。

（選定通信……ケミネが気づいた様子は無い……と言つ事は部隊召集、異変！）

立ち上がり、手荷物をケミネに押し付ける。

もしも敵が攻め込んできたのならばケミネを連れて行くわけにはいかない。戦闘力の点ではなく、技術者技能のアクトが一人も欠けてしまつては後に劣勢に追い込まれてしまう。

「ケミネ、あたしは少し自分の荷物を整理してくる、あんたはここで作業を続けなさい。いいわね、これは命令よ、絶対にこの場を離れないこと!」

念を押し、自室へと走る。

この状況で自分たち以外のアクトに選定通信を行ったと言つ事は、おそらくガンマやレイにも連絡は行つていなかろう。

そして、ここまで的確なノイズの欠片すら拾えない精度で選定通信を行えるのは母さんのデバイス、アリスだけ、ならば母さんが前線へ赴こうとしている。

「させないわよ！ 家族が一人でも欠けるなんて許さないんだから！」

自室のデスクやクローゼットを漁り、装備を整える。

両手の指先にセンサーが搭載された皮のグローブと大量のメス。全て医療用だが、アクトの体に使用するメスだ、人間が食らえばそれなりのダメージは負わせることが出来るだろう。

メスを白衣に仕込み、マントのように翻す。

今まで散々ガンマのマントを馬鹿にしてきたが、次の機会がもしあれば謝る必要があるだろう。格好はともかく、収納性や機能は優れていると認めざるを得ない。

『お久しぶりです、ご主人様』

「久しぶりね、ファイン。悪いけれど頼めるかしら？」

『ご主人様の為ならばどこまでも』

ファイン自身も感じ取つているのだろう、自分の主が自分を使い、このような言葉をかけると言う事は

『逝く時は共に逝きましょうか？ それとも先にお待ちしていましょうか？』

「できれば両方とも生存の方向で行くわよ、今回は長い付き合いでなりそうだわ」

ガンマと似た不敵な笑みを浮かべ、自室を出る。

母さん一人には任せられない。

（医者が患者を治すだけの存在とは思わせないわよ）

## 殲滅の次は？

その頃地上では

都市部のライフラインである電力工場前に集まる警備員たちと、それに対峙するガンマ。

正面ゲートを護るように何十もの人の壁を並べ、ガンマに向けて殺氣を放つが、当のガンマは気にした風も無く、それを見つめていた。

『この工場にもアクトが警備に当たっていたはずですが、それらしき反応はありませんね、おそらく……』

「すでに破棄され、今頃は溶鉱炉の中かスクラップ工場か、どちらにせよ関係ない」

ガンブレードの推測にガンマの答え、すでに壊されてしまったアクトに何の感情も湧かない、代わりに人間自らが、己を護る壁を切り捨てたことを思い知らせる。それだけを考えていた。

ガンブレードの切つ先を正面ゲートに向け、意思を込める。込められた意思はそのままガンブレードのグリップに装備されたセンサーに伝わり、エネルギー発現のプロセスを構築する。

「ガンブレード、ジェノサイドブラスターを発射する」

『了解、ジェノサイドブラスターの発射シークエンス、ゲートスリーワー完了』

切つ先に真っ赤なエネルギー球が構築され、それに触発されて周囲の大気も熱を持つ。

『エネルギーチャージ完了、発射シークエンスフォー到達』

そのエネルギー球を目の当たりにし、警備員たちが動き出す。

ガンマに特攻し、発射を防ぐためではない、ただ助かりたいがだけのために蜘蛛の子を散らしたように散り散りに逃げ出す見苦しい眺めに、ガンマの指先がトリガーにかかる。

「ジエノサイドブラスター・タイプ・インパルス。一人も残すな、生かすな、しくじるな」

トリガーを引く。

人間の頭部ほどまで膨れ上がったエネルギー球から光の帯が無数に放たれ、逃げ出した警備員たちの体を貫く。

それこそ一つの光が一人、三人、あるいは四人と、それぞれが急所を貫き、致命傷の一撃。緻密な操作と貫通性を備えた光の帯は、文字通りその場にいた人間を全滅させた。

発射終了後、刀身がスライドし放熱を行う。

これほどの出力だ、内部に溜まつた熱も相当なものだろうが

「悪いがもうひと働きだ、目の前の不愉快な建築物を破壊する

『問題ありません、集束砲ならばあと一発撃つても堪えられます』

最後の仕上げが残っている。

電力の供給源が無くなれば、人員的ではなく施設的な面で人間に多大なダメージを与えることが出来る。どうせ自分たちは基地を移転するのだ、電力など気にする必要はない。

ガンブレードの切つ先を建築物にセット。

同じように意思を込め、切つ先に真っ赤なエネルギー球を顕現させる。

「単純砲撃で構わない、復旧できないまでに動力炉を跡形もなく吹き飛ばせ」

『内部の構造データを検索……動力炉は地下です、地上からの水平砲撃では動力炉の大破には至りません』

「なら、飛ぶぞ」

地面を蹴り、飛翔。

これによりさらなる負荷がデバイスのガンブレードにかかるが、まだ問題はないはずだ。過剰加熱の警告が出るまでは酷使するしかない、いかにプロトタイプと言え、武器デバイスやオプションユニットがなければただのアクト、人間を上回る運動能力は備えているが、数百の敵相手に立ち回ることはできない。

「砲撃終了後スリープモードに強制移行、放熱終了後に再起動を許可する」

『了解しました、集束砲発射シーケンスの完了を告知、いつでも発射可能です』

「なら、頼む」

トリガーを引き、真っ赤な光の奔流が空中から施設を襲う。地面を抉るような高出力の一撃。例えどんなに頑丈な装甲で護られても、この一撃の前では無力。

当然、地下の動力炉は大破し、漏れ出したエネルギーが地面を伝い、施設の周囲を巻き込む爆発を起こし、空中から見下ろせば綺麗な放射状の荒野を拝むことができた。

『これよりスリープモードに移行します。強制起動の際は任意のパスワードを入力してくださいますようお願いします』  
ゆっくりと地面に降下しながら、ガンブレードのメッセージを聞き流す。

これで目的はほぼ達成した。

着地し、空を見上げ黙考する。

これより再び人間を狩るか、一度基地に戻るか。現段階で重装備の人間部隊に遭遇していないと言つ事は、やつらは同族 人間の保護よりもブレイカーの殲滅を選んだ可能性が高い。地下施設にはヤクモやシャインがいるので問題はないだろうが

「とりあえず、プログラム魔王をスタンバイ状態で待機、六時間以内に起動指示がなければそのまま終了してくれ」

今後の行動を決めるには魔王プログラムを停止させる必要がある。

一度感情を消してしまえば、それこそただの殺戮兵器と化してしまって、プログラムの停止、及び強制終了の権限だけは残された。それが幸か不幸かは置いておくとしても、今後の行動だ。

目を閉じ、地下にいるであろうヤクモにAI通信を試みるも、通信エラー。同じようにシャインもエラー、レイは距離が遠すぎる。

ケミネには繋がるようだが、通信状況だけで地下の状況は把握でき  
た。

おそらく、ヤクモとシャインが戦闘に赴き、ケミネとレイが移転  
作業を続けている。大まかな事情はわからないが、どうやら一度地  
下に戻る必要があるようだ。

「飛行コニーチトはガンブレードのスリープと同時に機能を停止、こ  
こから一番近い地下へのルートは…………十五キロ先か」  
地面を蹴り走り出す。

マントに仕込んであるエネルギーの補充剤を使えば、ここでエネ  
ルギーをロスしても問題はないはずだ。

誣いて問題があるとすれば時間。戦闘が始まっているのか、だと  
すればどれぐらい前からなのか、地下基地の詳しい状況まではわか  
らないので不安要素は多いが、今はできるだけ急ぐしかない。

（人様の家族を一人でも奪つてみる人間、その先に待つのは種の絶  
滅だ）

敵勢力は五千、施設が地下の端に建造されているおかげで包囲される心配はないが、地下空間に集結した人間の重武装隊の数にはさすがのヤクモとシャインも気圧されてしまう。

「母さん、対策は……」

「ないわね、唯一の救いはあなたが来ててくれたこと……」

勢いで飛び出したはいいが、この数はさすがに勢いだけでは対抗できそうにない。対抗するにはそれなりの戦力が必要となるが、地上のアクトたちと連絡を取ることができない。

おまけに各方面支部との連絡も完全に遮断されている。

現状を頭の中で整理し、導き出された答えは一つ。すでに残っているアクトはこの地下施設内の者たちだけなのかもしない、もしかすると各方面支部も、電波妨害を受けて通信が取れないだけかもしれないが、各支部が孤立した状態では壊滅も時間の問題だろう。

「シャイン、あなたは第三世代の部隊を率いて規制のかかった戦闘プログラムの防壁を解除してきて、現状で規制のかかった第三世代では人間にに対する戦闘能力は七割ダウンしているはず……」

未だに攻撃をしかけてこない人間たちの部隊を遠巻きに観察しながら指示を出す。先ほどから第三世代小隊の様子がおかしい、明らかに士気が低下しているのが目に見えてわかるほどに。

「そういうのはケミネの十八番なんだけれども……それにしても母さん、本当に何も考えずに最前線に立っているのね」

呆れたように隣の母に視線を移す。

後ろでは第二世代アクトが戦闘準備を整え、それを小隊長に据え、いくつかの小隊が隊形を整えているが、第三世代が戦場に飛び出してもすぐに壊されてしまうだろう、最悪第二世代の小隊長の足を引つ張る可能性もある。

「仕方がないでしょ、今までこういったことは全部ガンマとレイ

に任せっきりだったんだもの、不手際は否めないわ」

「部隊をゾロゾロ率いてラボに行く必要はないわ、十分。十分だけ時間を稼いでくれれば通信プログラムを介して解除データを送るから、それまではお任せしますよ、母さん」

言い終わると同時に基地内へと戻るシャイン、それを見送り、再び人間の部隊に目を向けるヤクモ。準備は整ったようだ、敵部隊が進軍を始めたのを見て、ヤクモも手を擧げる。

「全軍進撃！ 各自リアルタイムで指示を出すので通信チャンネルは常にオープン、アクトの意地を見せなさい！」

咆哮を上げ、部隊が進軍する。

互いの距離は三キロ程度、お互いモニターで敵戦力の行動や数を把握しているが、それでも攻撃方法まではわからない。

AIアリスを介してモニタリングしても、敵の武装まではわからぬ。

（地上の陽動は無意味だったってわけね……多少の犠牲はやむを得ないってこと）

自らの同族すら切り捨てる策に多少の苛立ちを覚えるが、戦争が長引けばいずれ地上の非戦闘員も、戦力として敵に回る可能性がある、それを考えれば、ガンマに地上の敵勢力候補を削つてもらうのも仕方がない。

「ガンマとレイはこちらの切り札、そう簡単にカードは見せないわよ

ほくそ笑むが、この戦闘を凌ぎ、基地を転移できなければその時点で負けが確定してしまう。敵を全滅させなくてもいいのだ、せめて必要物資の輸送を完了させ、その上で地下通路の完全破壊、それさえ完了すればあとは撤退すればこちらの勝ちだ。

『戦闘が開始されました、敵の主武装は弾丸を射出するタイプの質量兵器、広域使用の兵器の存在は今のところ見受けられません』

「当然ね、地上からこちらに来るルートを通るのにそんな馬鹿でかいミサイルや爆弾を持ち込むわけにも行かないわよ

現在戦闘が起こっているであろう場所に目を向ける。建築物や木が邪魔をしてはつきりとはわからないが、ややこちらが押されているようだ。

『こちらの戦力一割減、敵部隊なおも進軍』

「あしたちも出るわよ、残存部隊はここを最終防衛ラインに三百メートルのエリアを死守、第一から第三部隊まではあたしに続きなさい」

二丁の銃をコートから取り出し装備する。

AIアリスをデバイスにし、銃に内蔵されたAIと結合し、起動。『デバイス起動、情報管制システムを維持しつつ武装モードに移行します』

起動を確認し、駆け出す。

その後に続くように部隊も進軍、敵の進軍は予想以上に早く、基地まで一キロの距離まで迫っていた。

「シャイニングレイン起動！」

人間とアクトとの混戦の中、最適な攻撃方法を即座に導き出し、実行する。

ガンマが使用したジェノサイドインパルスと同じ、敵味方識別式の広域射撃。

『シャイニングレイン起動、識別時間に二十秒いただきます』

「急いで」

射程距離には入ったが、それは敵にとつても十分攻撃が届く距離、こちらに襲い掛かる無数の弾丸を身体能力だけで回避しつつ待つのは、予想以上に困難なものだった。

すでにコートを弾丸が貫き、軽い損傷を負つてしまつている。

『識別完了、最終発射シークエンス……完了。いつでも撃てます！』

「人間が、調子に乗るなああ！」

銃声の響く中、その声だけがはつきりと戦場に響き、銃口が空に向けられた。

銃口に青いエネルギー球が顕現したのを確認すると、トリガーを

引き発射。空に無数の光の帯が放たれ、的確に人間だけを貫くはずだった。

「嘘でしょ！」

光が直撃寸前に霧散し、敵になんのダメージも与えることなく消失、ヤクモを襲う弾丸は尚も続いた。

『敵部隊の装備に出力兵器を無効化するシステムが搭載されているようです、人間の周囲三十センチに不可視の防壁が張り巡らされています』

「これが切り札ってわけね！」

弾丸でボロボロになつた大岩に身を隠すが時間の問題だろう、遅れて他の部隊も到着するが同じように遮蔽物に身を隠している。

『こちら前線のガンマ一番隊、こちらの攻撃が全て無効化される…至急指示を！』

『同じく前線のレイ一番隊、完全に包囲された、敵の兵装にパワー

スースのような物を確認、申し訳ありませんが戦線を離脱さ…』

『こちら後続のガンマ二番隊、敵の弾幕が凄すぎて反撃に転じる』  
とが出来ません、至急指示を！』

ガンマ一番隊と、レイ一番隊との通信は完全に途絶えた。後続のガンマ二番隊小隊長の第一世代型も第二世代に足を引っ張られる形で身動きが取れないようだ。

『「この分ですとシャイン様がプログラムを完成させて規制のかかつた部分を解除しても戦況はかわりませんね』

アリスの言葉に血が上るのを感じるが、そう言つのももつともだ、こちらの主兵装はエネルギーを敵にぶつける出力兵器ばかり、しかしその兵器も敵の開発した物によつて完全に無力化されているのだ。

『敵部隊進軍、距離五百』

アリスが急かす、とはいへこの状況で取れる方法は一つしかない。『オープンチャンネルで全軍に通信、総員全力で基地まで後退、その際できるだけ敵の足止めが出来るよう建築物などを倒壊させ敵軍移動の幅を限定させること、撤退後は基地移転作業を最優先し、完了後地下通路を破壊すること、通信は以上』

味方の返事を聞く必要はない、基地最高指令の自分が言つのだから異論は許さない。

『母ちやん、どういふことやねん！』

ケミネからの通信が入った。この子にも直接言わなければならぬいだらう、シャインのように作業を放棄してこられては今後に大きく影響を及ぼしてしまう。

『聞いての通りよ、あなたとレイは部隊を率いて作業を急ぎなさい、これは最高指令であるヤクモ・アクトリップスの命令と共にあなたの母親としての頼みです……わかってくれるわね』

『こんな時だけ指令面で母親面かい！ 地下通路爆破したらその後母ちゃんはないするん！ うちは反対や、それやつたら兄貴やレイを呼び戻して……』

『いい加減にしろ！』

チャンネルに割つて入つてきた怒声に、ケミネの言葉が止められる。ケミネは止められてもシャインだけは止められないであろうと予想はしていたが、端から自分に着いてくれるつもりのようだ。

『シャイン姉ちゃん……なんでや、なんで止めるねん！　母ちゃん死ぬつもりやで、うちらを残して一人で……』

『安心しろ、母さんは死なない、それに一人じゃない』

通信の音声とかぶつて聞こえた生の音声にヤクモが振り向くと、そこには白衣姿の娘が立っていた。

『心配しなくとも母さんとあたしのメモリーバックアップは取つてある、基地を完成させればそれを基にまた体をつくってくれればいいだけよ、その時はもっとメリハリのある体で頼むわよ』

軽口を叩きながらシャインが何かを敵部隊に放り投げた。数秒後、轟音と熱波を撒き散らし、敵部隊の一部を跡形もなく消し飛ばす武器　爆弾。

『ほな、今輸送しているメインコンピューターにバックアップがあるんやんね？　信じたで？　嘘ついたら怒るで？』

『心配するな、お姉さまは嘘をつかない、だからさつさと作業を終えてしまえ、早く終わればあたしたちの生存率も上がるから。通信は以上、頼んだわよケミネ』

通信を切り、白衣の中から球状の鉄の塊を取り出し再び放り投げる。

同じように敵戦力を削り取り、進軍速度も目に見えて落ちた。

「母さんもこれを、これならば敵にダイレクトなダメージを与えられます」

ベルトに結ばれた無数の爆弾と小さなチップをこちらに手渡すシャイン。敵戦力を多少なりとも削つてはいるが、後続の部隊が質量兵器用の武装を整え、尚も進軍してくる。

「これはアリス専用のチップです、銃のグリップに装着してください、出力兵器に変わりはありませんが、炸裂タイプに自動変換されますので、地面を田掛けて射出すれば大量の飛礫が敵を襲う質量兵器となります」

白衣からメスを取り出し、指の間に挟みこむ。シャインの武器には敵の無効フィールドは通用しない。

『敵部隊が一手に別れました、一方はこちらへ、もう一方は基地へ直接攻め込む算段のようです』

アリスが新しい情報を提供してくれるが、それに対する策までは提供してくれない。取れる選択肢は三つ。

一人でこの場の敵部隊を殲滅。

一人で基地に向かう敵を殲滅。

別行動でそれぞれの敵を足止め。

このいずれかに限定される。

「ファイン、どちらの方がまずい？」

『基地に向かう部隊の方が数が多いです、加えてパワースーツ装備との情報も聞き及んでいますが、それらも基地の方へ向かったものと思われます』

「決まりだね」

ファインの分析に、シャインの口の端が吊り上る。どのみち想定していた事態だ。

「母さんはここをお願い、あたしは基地の防衛に向かう」

「…………わかったわ、無茶しないように…………って言つても無駄でしちうね」

「さすが母さん、よくわかつてるわね」

「シャイン……最後に聞いてもいい？」

「最後にするつもりはないけれど、聞いてあげてもいいですよ？」

「さつきケミネに言つた記憶メモリーのバックアップって……」

「嘘に決まってるでしょ、こんなタイミングでそんな都合よくいくわけないじゃない」

この子はレイに比べれば感情豊かな子だが、それでもあまり笑わない、他の子供たちの前ではクールなお姉さんを貫いていたようだけれども、それでも

「あなたもレイもケミネもガンマもみんなあたしの子供、子供が親よりも先に死ぬのは許さないわよ」

ヤクモの言葉が意外だったのだろう、メモリーに關しての返

答が返つてくると思っていたシャインは、一瞬だけ呆気に取られた表情を見せたが、すぐに笑顔を見せた。

「当たり前じゃない、あたしは家族の中の誰よりも長生きするつて決めてるんだから」

そう言つて基地の方へと走り出した。

それを見送り、シャインに渡されたベルトを装備し、再び銃を握る。

「さて、これ以上かわいい娘の負担は増やさせないわ、精々ここで時間を潰していいでしょうだいね」

不敵な笑みを浮かべ、遮蔽物から踊りだし、再び戦闘を開始した。

## 急がれる引越し作業

すでに物資の八割は輸送を終えた。

何体かのアクトはすでに樹海で基地の建造を始めているだろ。それよりも気がかりなのは地下の基地だ、先ほどから急速に作業速度が増している。それに加え、こちらの方に補充される人員の何体かは負傷をしているようだつた。

事情を聞いても答えられないで済ませられてしまう。部隊長にも答えられないと言つのならば、最高責任者の母さんが何らかの情報規制を敷いたと言つ事なのだろうが、こじらに人員を回すと言つ事は作業を急ぐと言つ事。

「各員作業のペースアップを要請

囁くように自分が指揮下に置いている全作業員へと通達し、それぞの返事を聞くと、視線を都市部の方へと移す。

先ほどまで頻繁に起こっていた爆発 おそらくガノマ兄さんだろ。が納まっている。それと同時に都市部上空に大型の飛行船。『ありや輸送型だな、しかし解せねえ、ガンマが地上での陽動を止めたと言う事は地下施設に敵部隊が押しかけていると見て間違いねえだろうが、こちらへの増員などを考えると九割方地下施設の戦力は放棄されたつてことだろうな』

「ええ、そして敵の足止めをして作業終了と同時に撤退、そういう手筈でしうね」

レイの予想はほぼ当たつていた。

唯一違うのは、自分の母と姉がほぼ単独で直接足止めをしているということだけだ。

「いざれにせよ今は作業を急ぎましょ、何かあつても母さんや姉さんならどうにかしてくれるわ」

囁く声は風に消されそうなほどか細いが、それでも自分の皮手袋

の石に搭載されたA.I.、ギガントにははつきりと聞こえたようだ。

『お前の家族はどいつもこいつも常識ハズレだからな、人間なんかバラバラにしてくれるだろ？』

未だに都市部上空を旋回する輸送機から視線をはずし、輸送作業の手伝いをしに森の中へ戻る。今自分にできるのは『えられた任務を最優先でこなすことだけだから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5242w/>

---

クト・ファミリア

2011年11月23日14時50分発行